

Poems and Essays from a Police Officer from the Kamagasaki. Osaka. Community During the High Growth Era: A case study of the "Hadaka-no-Kai" group's activities

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/47424

高度経済成長期の大阪・釜ヶ崎に生きた警察官の詩と随想

—文芸サークル「裸の会」の活動を事例に—

能 川 泰 治

はじめに

本稿は、高度経済成長期の大阪・釜ヶ崎地域で活動した文芸サークル「裸の会」の活動について、その主催者である警察官が書き残した詩と随想を中心に考察し、当該期の都市下層社会における地域再生活動について考えようとするものである。

釜ヶ崎は、「寄せ場」と呼ばれる日雇労働者の労働市場の機能をもつ一方、近年の不況と高齢化に伴って、福祉マンションや高齢者向け特別養護施設が進出し、日雇労働者の街から福祉の街へと変貌しつつある地域である。戦前から「木賃宿」と呼ばれる簡易宿泊所（以下簡宿）が建ち並んでいたが、敗戦直後には戦災で焼け出された人びとが暮らすバラックが次々と建てられ、スラムの様相を帯びていた。

ところが、朝鮮戦争による荷役業務の増大を背景に、労務供給業が活況を取り戻したのに伴って簡宿の増新築が進み、地域にドヤ街の様相が復活する。さらに高度経済成長期（1960年から1970年代初頭まで）になると、力役型労働力（建設土木・港湾労働など）の急激な需要増にあわせて、西日本を中心とする農村や炭鉱から若年で単身の男性労働者が続々と流入するようになる。こうして釜ヶ崎は日本の高度経済成長を最底辺から支える役割を担うようになるが、賃金のピンハネや暴力行使などの日雇労働者に対する差別待遇が常態化していたこと、それに対する行政と警察の取り締まりが不十分であったことは、日雇労働者の不満と怒りを蓄積させ、この地域に暴動を頻発させる要因となった。

そして、1961年8月に第一次暴動が発生すると、府は労働行政を、市は民生行政を担当するという、対策の枠組みが作られた。そして、労働行政に関しては大阪府労働部西成分室が設けられて職業紹介に乗り出し（翌年設立された財団法人西成労働福祉センターに業務移管）、民生行政に関しては家族をもつ労働者向けの施設として愛隣会館と愛隣寮が新設された。さらに1970年になると、建物内部に西成労働福祉センター・あいりん公共職安・大阪市社会医療センターが同居する、あいりん総合福祉センターが建設された。さらにその一方で、家族世帯をもつ労働者には常用化と住宅供給というかたちでの地域外移住が政策的に進められたため、それまでは女性や子どもの姿も見かけられたのが、徐々に男性単身労働者だけが居住する街へと変貌するようになった。こうして、高度経済成長期以降の釜ヶ崎には、単身の男性日雇労働者が集住する街としての様相が定着するのである¹。

次に、本稿で考察の対象とする「裸の会」は、第一次暴動発生直後に新設された西成警察署の防犯相談コーナーを担当する、自称「三文詩人」の松原忍が会長となって組織された文芸サークルである。松原の発案に賛同する西成分室の職員や日雇労働者数名を発起人として1962年1月

に発足し、「詩を書こう」「はだかになって話し合い、はだかのところをいやし、文芸を通じて心のよりどころをもとめよう」などと呼びかけて会員を募り、集まった詩・短歌・俳句・随筆などを掲載した会誌『裸』を月刊誌として刊行した。さらに、毎月定例の詩・短歌・俳句の研究会を別個に開催し、会員が作品を批評し合う場とする一方、毎月定例の懇談会も開催し、会活動や時事的な問題に関する意見交換の場としている。会員は「アンコ」と呼ばれる（あるいは自称する）日雇労働者（以下労働者）を中心として、地域内で行商・雑役に従事する女性や、簡宿の管理人などで構成されており、会発足直後に 80 名いた会員の数は、それから 10 年近く経過した 1970 年の時点では、580 名に達していたという。

以上のような活動は、警察官としての立場を離れた一詩人としての松原と、労働者の有志 1~2 名で構成された編集部によって担われていたが、編集部を構成する労働者有志は途中で入れ替わることがあったのに対して、松原は刊行された会誌全ての編集作業に関わっており、研究会や懇談会にも殆ど休まずに出席していた。また、「警察の御用クラブ」と批判されることもあったが、地域の労働福祉施設・医療機関の職員や、一部の支援団体の協力を得ながら活動を持続させ、会誌は 1971 年 4 月に解散するまでの間に休刊することなく 110 号まで刊行している²。その意味で「裸の会」は、警察の暴動再発予防策の中から生まれた文芸サークルであった。ところが、戦後の釜ヶ崎の歴史に関する研究の中で、「裸の会」の活動が取り上げられることはなかった。

そこで、関連する先行研究にふれることにしよう。戦後の釜ヶ崎とそこで生きる日雇労働者・野宿生活者に関する研究は、主として地域再生活動の関係者や地理学・社会学研究者によって取り組まれてきた。そして、釜ヶ崎の歴史と現状を一般読者に理解してもらうために、これらの研究者たちの共編著というかたちで、当時の研究水準を集大成した入門書も度々刊行されてきた³。

それらの入門書で必ずふれられてきた重要論点の一つに、単身の男性日雇労働者が集住する街がどのように形成されてきたのかという問題がある。その際に必ず指摘されてきたのが、暴動発生を契機とする釜ヶ崎対策が地域の姿を大きく変えてきたという点であるが、その際に取り上げられるのは、行政による労働福祉政策や、労働運動の成果としての労働条件の改善であって、地域の中に独自の文化を根付かせようとする活動が取り上げられることはなかった。例えば、地理学・社会学・歴史学などの最新の成果をまとめた前掲『釜ヶ崎のスヌメ』の総論にあたる原口剛「釜ヶ崎という地名」は、暴動をきっかけとして釜ヶ崎対策が開始され、地域の姿が大きく変えられていったと指摘するが、そこで具体的に取り上げられているのは、家族世帯をもつ労働者が政策的に地域外へ移転させられたことと、大阪万博に備えて若年の男性単身労働者が釜ヶ崎に確保されたということである。そして、『釜ヶ崎のスヌメ』の中で釜ヶ崎対策をもっとも詳細に述べた海老一郎「日雇い労働者のまちの五〇年」は、釜ヶ崎が日雇労働者の街として形成されてきた歴史を、第一次暴動以降の労働問題に対する行政の対応を軸にしてあとづけている。

そこで本稿では、先述した性格をもつ「裸の会」について、主催者・松原忍の詩と随想を主たる考察対象とし、松原は釜ヶ崎で生きる労働者とどう向き合ったのか、さらに暴動が頻発する地域の現状とどう向き合ったのかを明らかにし、「裸の会」が当該地域における地域再生の歴史を考えるうえで無視できない位置にあることを述べたいと思う。

I、「三文詩人」を自称する警察官

(1)松原忍の経歴

「裸の会」を主催した松原忍とはどのような人物なのであろうか。自伝が刊行されていないので詳細は不明であるが、手がかりが全くないわけではない。

「裸の会」が解散する直接のきっかけは、1971年4月をもって松原が定年退職を迎えたことにある⁴。当時の定年退職年齢は58歳である。これが満年齢であれば、松原は1913年生まれということになる。また松原は、『裸』に毎号欠かさず自作の詩・短歌・俳句を掲載しているが、これらのうち110篇の詩を、『釜ヶ崎羅漢』と題した詩集にまとめて1986年に刊行している。その「あとがき」には、松原の経歴が要約的に述べられている。それによると、松原は兵庫県赤穂郡船坂村（現在は赤穂郡上郡町）の農家の四男として生まれ、小学校卒業後に父の意を受けて神戸に出て大工に弟子入りしたが、出奔して東京に行き、日本印刷学校に入学している。この頃に詩作を覚えたが、そのことを「私のところに詩神を植えつけられた」と表現している。そして、同校を卒業後に帰郷して農業や煉瓦工として働いたが、両親を残して郷里を飛び出し、大阪で食堂のボーイや旋盤工として働き、やがて1939年8月10日に召集されて中国に渡り、さらに日米開戦後には南方戦線に移動させられ、「戦争という悲惨な現実の中で生きることを余儀なくさせられた」という。そして復員後大阪府の警察官になり、1960年から西成警察署に勤務している⁵。

以上のように松原は、郷里からの出奔、労働者としての生活、「戦争という悲惨な現実」といった経験と、詩作という自己表現能力の持ち主であった。それでは、このような経歴と個性をもつ松原は、釜ヶ崎で生きる労働者どどのように向き合っていたのであろうか。会結成の経緯を再確認したうえで、松原の詩と随想を考察しながら考えてみたい。

(2)詩と随想にみる釜ヶ崎との向き合い方

松原自身が述懐するところによれば、松原が「裸の会」結成を思い立ったのは、防犯相談コーナー開設から約1ヶ月後の1962年10月のことである。大阪府労働部西成分室に毎日1回出入りして、労働者からの相談を受け付けているうちに着想したという。会発足から1年が経過した時点で、そのときに実感したことを松原は以下のように振り返る。

職を求めて集る人達の群は一大集団の如く見えるが、この集団の中の一人ひとりの人間像を見つめると、この街に流れて来た人達は、誰もが深刻な孤独感にさいなまれながら生きていることを私は悟ったのである。私は警察官と言う立場を離れ、私は三文詩人であるが、一詩人としての立場において、これらの人達の心の寄り処とするために、私は文学サークルを結成しようと思い立ったのである⁶。

労働者は孤独に苛まれていることを悟り、一詩人の立場で、労働者の心の寄り処とするべく文学サークル結成を思いついたという。このときに作ったのが「戦慄」と題した詩である。この詩を雑談がてら西成分室の職員に見せたところ、その職員によって分室に「戦慄」が掲示され、それを読んだ二人の労働者が松原に会いたいと申し出てきた。これをチャンスと見た松原は、二人に会って文学サークル結成を提案、さらに既知の労働者と分室の職員にも働きかけて賛同を得、

これらを発起人として「裸の会」を発足させたのである。

以上のように、「戦慄」は「裸の会」が組織されるきっかけとなった詩なのであるが、そこにはどのようなことが綴られていたのであろうか。

戦慄

私は見た
蒼氓の群なすここ釜ヶ崎落日の街に
父と母を
妻と子を
幼き弟妹を棄てて流れ来た
自らが人生の過まてる諸行の数々にさいなまれながら
激烈な一杯のバクダン⁷に
安息の時を求めてさまよう群衆を

私は見た
思想を失った数千の群衆が
権力に抗して投石し
血を流した釜ヶ崎旧紀州街道を
権力に抗することなく阿諛追従する
あくせくとした人生に愛想をつかし
この街に流れ来た男が
今宵寒々とした姿で北へ向って歩いて行く孤影を

私は見た
人生のあらゆる苦悩の充満するここ蓮沼の街に
今日も 落日の栄光を求めて漂泊う孤独の精神を

かの日私は 群馬高崎の友から詩神を植えつけられなかったならば かの日私は 絶望と孤独に堪えかねて 私を欺き去った女に復讐をなし 蒼青きこの額に前科者の烙印を押され 数々の悪行を重ねながら 激烈な一服の麻薬を求めて この街をうろついていたかも知れない

かの日私は 父の言いつけに叛くことなく大工になっていたならば あるいは今頃 黒い背広を身にまとい 胸に代紋の金バッジをつけ 肩で風を切ってこの街をのし歩く無頼の徒になっていたかも知れない

— 静かなる戦慄 —

かの日私の最良の精神が 詩神に憑かれたばかりに なぜか私は 死の灰の怖れも知らず

下界の暗い河床にひしめく 人の世の苦悩を求めてさまよう 孤独な人間と化したのであった⁸

この詩の主題を、筆者なりの言葉で表現するならば、それは「孤独であることの発見」になる。労働者たちが孤独であること、そして松原自身も同様に孤独であることを発見したこと、しかしながら松原の心には「詩神」が宿っていたがゆえに、孤独と絶望に耐えかねて過ちをおかさずに済んだことにも気づかされ、「静かなる戦慄」を覚えたというのが、この詩の主題であるように思われる。さらに筆者の目を引くのは、この詩で描かれた労働者たちの生き様である。特に冒頭の8行に描かれているように、家族と別れて孤独な日々を送り、これまでの人生でおかした所業に苦悩し、飲酒によるほかにはその憂さを晴らす術を知らない、まさに孤独と絶望としか表現しようのない生き様が描かれている。

そこで、注目すべき点を二つほど挙げておきたい。一つは、「戦慄」で描かれた労働者の生き様は、先述した松原の人生経験とかなり重複するという点である。そしてもう一つは、「詩神」という表現である。「詩神」が宿っていたがゆえに、これまでの人生で過ちをおかさずに生きることができたと綴られている。先述した経歴の中でもこの言葉が使われていることからして、「詩神」には単なる詩の創作にとどまらない意味があるように思われる。それでは、松原は詩を作ることにはどのような意味があると考えていたのか。

まず、第一の論点について。『裸』各号の巻頭には、会活動の現状と課題や時事的な問題について論じた巻頭文が掲載されている。その中には、松原の文責であることが明記されたものもあり、特に会が発足して間もない頃には、会結成の趣旨を会員に説き聞かせるために書かれたものが頻繁に掲載されている。それらの中には、以下に引用するもののように、詩作することの意味について松原がどう考えているのかが示唆されているものがある。

「裸の会」を結成するに至った動機は、私自身が孤独な人間であり、釜ヶ崎と云われる街には、私と同じく孤独な人達が沢山住んで居ることに気づいたからである。

私は孤独な人間であることから、詩作をすることによって、貧しくとも私の人生を、心豊かに生きるべく、過去を、現在を生きて来た人間である。私は、私と同じ生き方をしている人達が、この街には沢山住んでいるに違いないと思ったことから、それらの人達が、人生をより力強く生きて行く為の心の寄り処とすべく、「裸の会」を結成したのである⁹。

「戦慄」で綴られたことが明確に述べられている。松原は、労働者と自分が共に孤独であると認識していた。そして、次に引用する詩からは、そのような実感は、労働者の生き様にかつての自分の生き様を重ね合わせていることに由来していることが窺える。

釜ヶ崎羅漢

昔、ベトナムにいた時もそうであったが、この街に来て街を歩いている時、ハッとすることがたびたびある。

…… (中略) ……

日暮れ時になると、ふろしき包を腰に提げ、泥まみれの地下足袋をはき、烈しい一日の労働に疲れ果てた表情で、通天閣の灯が見えるこの街に帰って来る、労働者の群を見かけると、

かつて昔、生き悩んだ果てに地下足袋をはき、泥まみれになって働いた頃の己の姿を思い浮かべるからである。

諸々の悲哀を秘めた群像よ、釜ヶ崎の羅漢よ！その中のひとつに私の顔があり、戦争や貧乏や、文学や怠惰や、酒やギャンブルのために呻吟する父や母や、妻やきょうだいや、多くの私の仲間たちの顔がある¹⁰。

労働者はかつての松原自身と重なり合う存在であることが浮き彫りにされている。明らかに松原は、釜ヶ崎に生きる労働者たちの生き様を、かつての自己の生き様と重ね合わせながら観察していた。そのような地域と住民への向き合い方は、蔑視や同情とは異なる。まさに「共感」という表現があてはまるように思われる。しかし、だからといって松原は、自己の人生を労働者のそれと同一視しているわけではない。先に引用した巻頭文に明記されていたように、松原は孤独ではあったが、詩作をしながら過去と現在を「心豊かに」生きてきたという自負をもっていた。そうであるがゆえに松原は、孤独と絶望に打ちひしがれた人びとを見るにつけ、働きかけずにはいられない衝動に駆られるのである。

ここまで参照してきた巻頭文と詩から窺えるように、松原は釜ヶ崎で生きる労働者の孤独に共感する姿勢をとっていたが、自身は詩作を通じて「心豊かに」生きてきたということも自覚していた。これらのことから、松原にとって詩作とは、孤独と絶望を克服して人生そのものをやり直そうとする意欲を取り戻す営為でもあることを意味しているように思われる。そこで、先に挙げた二つ目の論点について、さらに考えてみよう。

「裸の会」は、詩人と言う文化人の集いなのである。たとえその身が日雇労働者であっても、生活の中から詩歌を作り出すということにおいては、いかに身形が貧しくとも、立派な文化人なのである。故に「裸の会」の会員は、今まで何人もなし得なかった釜ヶ崎と言われる街に、私達の方で立派な生活の歌を作り出す、釜ヶ崎文学を築き上げる使命を背負って立っているのだと云う誇りを抱いて良いのではないかと思う。

それがためには、会員諸兄におかれては各自が日常の生活において、文化人と呼ばれるにふさわしい生き方をしていただきたいと念願する次第である。a われ〜が苦しい日常生活の中から、真実なものを歌う立派な作品を創作して行くことに努める。ただそれだけでも「裸の会」の使命は全う出来得ると言う事を私は確信するものである。

私は単なる趣味で詩作しているものではない。

自分と云う一個の人間を築き上げるために詩作を続けているのである。生活即詩作なのである。「裸の会」会員諸兄は、「裸の会」が背負っている使命の大きさを深く認識していただきたい。

……（中略）……

世のジャーナリスト達が、世人をして、釜ヶ崎と云う街についてこの感覚を迷わせたことに対する大いなるあやまちを、われわれ「裸の会」会員は是正し、明るい釜ヶ崎の街造りに努力しようではないか、社会奉仕的な活動も結構ではあるが、b むしろ文学をすると云う純粹な文化活動を通じて明るい釜ヶ崎の街造りに寄与する。それが「裸の会」の使命であると

私は考える¹¹。

(下線能川。□は判読不可)

上は、松原が会員に求めていることが示唆的に記されている、会誌の巻頭文を引用したものである。詩人に相応しい生き方をすること、即ち詩作そのものを生活とすることが求められている。ただそのために何をすべきなのかが明記されていないが、この点を理解するための手がかりはある。下線部 a に注目したい。ここも抽象的な表現であるが、労働者にとって自らの生活を詩で表現するために必要なことは何かということに考えをめぐらすことによって、会員に何が求められているのかを推察することは可能である。まず確実に言えることは、相当な自己鍛錬が必要ということである。過酷な肉体労働に従事することが日常生活の大半を占める労働者にとって、詩作のための時間を確保するのはもちろんのこと、疲弊した身心でもって自らの生活を詩で表現するのは容易なことではない。また、飲酒やギャンブルで憂さを晴らすことを常としていた者には、そのような生活習慣を改めることなくして詩作は果し得ないであろう。以上のような自己鍛錬を通じて生活習慣を改めることが、詩人に相応しい生き方を身につけることであり、会活動の当面の目標もそこに置かれていたように思われる¹²。

そして、仮に松原の提言に従うかたちで会員が詩作に取り組んだなら、過酷で不安定な日常生活を送る人びとの苦悩や願望を詠んだ詩歌が次々と生れ、そのような創作活動を可能にするための自己鍛錬、即ち飲酒やギャンブルに依存する生活習慣を改善する動きが広まることであろう。その意味で、「裸の会」の活動は、下線部 b にあるように、釜ヶ崎に文学を根付かせ、「まちづくり」を実現することも活動目標の射程に入れていたのである。

II、暴動頻発の時代の中で

(1)頻発する暴動に直面して

先述したように、第一次暴動発生直後に新設された西成警察署の防犯相談コーナーの活動の中から着想された経緯からして、「裸の会」は暴動再発予防を目的とする組織であった。しかしながら、会が発足してから解散するまでの 10 年のうち、1960 年代後半から 70 年代初めにかけての時期は釜ヶ崎で暴動が頻発する時期でもあった(表参照)。このうち、1966 年には 4 回にわたって暴動が発生しているが、この中で第一次暴動以来の大規模暴動として各方面に衝撃を与えたのが第五次暴動である。これは、新今宮駅南側にある碁会所から火災が発生した際に、「消防車が来るのが遅い」と見物人が激昂し、やがて近隣のパチンコ店に投石が開始されたところ、店の側から放水して対抗したために騒ぎが暴動に発展したというものである。暴動は翌日以降も続き、交番が焼き打ちにあったほか、機動隊に追われた群衆が地域外の歓楽街に逃げ込んだため、規制範囲もそれだけ拡大することとなった。また、1960 年代後半の暴動は、酒代の支払いをめぐる店員と労働者との口論(第四次)、めし屋での支払いが不足していた労働者に対する店員の暴力(第六次)など、地域内の商店と労働者とのトラブルが原因となって発生したところに特色があった¹³。

それでは、以上のようなかたちで暴動が頻発する状況を松原はどう見ていたのか。この時期になると、松原が書いた巻頭文は少なくなるが、毎号の編集後記を松原は欠かさず書いているので、

これを手がかりにすることで松原の考えを窺い知ることができる。それによると、第五次暴動発生直後に書いたと推察される53号(1966年7月発行)の編集後記には、「こんどの騒動で痛感したことは、労働者と商人と役人との間に人間関係をつくることの必要性である。人間にとって、差別待遇された時の怒り程大きな怒りはないからである。裸の会の精神を街中に広めたいものである」と記されている。労働者が差別されていることへの批判と、その裏返しとして、労働者・商店経営者・行政が対等な関係で提携することによって地域を再生することの必要性が、示唆されていると言えよう。

そして、当時の『裸』の巻頭文に「裸の会同人」¹⁴の文責で記された訴えは、先にみた松原の問題提起をふまえた内容であった。例えば、54号には「裸の会同人」の文責で「あすの釜ヶ崎のために」と題した巻頭文が掲載され、以下の引用の特に下線部に見られるように、松原が提起していることと同じ内容の訴えが記される。

私たちはこれまでに、なんども声を大にして叫び続けてきたのである。福祉施設の改善も必要だが、釜ヶ崎で暴動が起きる原因は、多くの労働者が、権力とか金力とか、暴力などによって虐げられ、人間扱いをされないという不満があるからだ。それがライバル意識を植えつける原因となり、騒ぎを惹き起こす大きな要素となっているのだ。だから騒ぎをなくし、釜ヶ崎を愛される街にするためには、労働者、商人、役人、こういった人たちの間に、人間関係を深めていく運動を街ぐるみで起こすべきである。

さいわい府や市のオエラ方は、最近になってやっとこのことに気づいたとみえ、去る六月二十九日に愛隣会館において、お役人や地元の商人や民生委員たちが集って、初の懇談会を開いたことは一步前進したと思ったが、その席上において市のオエラ方が「騒ぎをなくすには、労務者の精神面での指導が根本だと思うから協力して欲しい」と地元の人たちに要望したということを知っては、全く失望せざるを得ない。

ただ一方的に労働者を指導するといったものの考え方こそ役人らしい考え方であり、このような考え方を改めない限り、とうてい釜ヶ崎は救われないのだ。労働者を指導するというなら、商人や役人たちの、労働者に対するまちがった考え方も改めてもらうことを要望する

表、釜ヶ崎暴動一覧

	発生年	発生日
第1次暴動	1961年	8月1日
第2次暴動	1963年	5月17日
第3次暴動		12月31日
第4次暴動	1966年	3月15日
第5次暴動		5月28日
第6次暴動		6月21日
第7次暴動		8月26日
第8次暴動	1967年	6月2日
第9次暴動	1970年	12月30日
第10次暴動	1971年	5月25日
第11次暴動		6月13日
第12次暴動		9月11日
第13次暴動	1972年	5月1日
第14次暴動		5月28日
第15次暴動		6月28日
第16次暴動		8月15日
第17次暴動		9月11日
第18次暴動		10月3日
第19次暴動		10月10日
第20次暴動	1973年	4月30日
第21次暴動		6月14日
第22次暴動	1990年	10月2日
第23次暴動	1992年	10月1日
第24次暴動	2008年	6月14日

注) 原口剛「騒乱のまち、釜ヶ崎」(原口ほか編『釜ヶ崎のスヌメ』(洛北出版、2011年))所収の一覧表を、形式変更のうえで引用。

勇気が、お役人にはどうしてないのだろうか¹⁵。

(下線能川)

次に注目されるのは月例懇談会である。この懇談会では、第五～六次暴動発生と重なる時期に、2回にわたって「釜ヶ崎騒動はなぜ起きるのか」(6月15日)「釜ヶ崎騒動をなくすにはどうしたらよいか」(7月15日)というテーマを設定し、参加した会員たちの意見表明を求めた¹⁶。このうち、6月の懇談会は、「釜ヶ崎騒動の原因は何か」「マスコミに対する要望」「釜ヶ崎対策に何を望むのか」というかたちで話題を整理して議事進行がなされたが、それぞれの話題に対しては、「西成署員は吾々日雇いを馬鹿にする」といった、警察に対する怒りの声も含めて、多岐にわたる意見・不満・要望が出された。また、2回を通して複数名のマスコミ参加者が参加しているほか、7月の懇談会には西成警察署長と大阪府労働部・大阪市民生局の関係者計6名、さらに地元のパチンコ店・酒店・簡宿の経営者計6名も参加している。釜ヶ崎対策の担当者と商店の経営者に会員の声を伝えようとする、会の意図が窺えるであろう。

それでは、ここまで見てきた「裸の会」の活動をどのように意義づければよいであろうか。まずふまえるべきは、第五次暴動発生の直後に、府・市・府警それぞれのトップクラス(府労働部長・市民生局長・府警防犯課長)からなる恒久的連絡協議会として西成問題対策協議会が組織されたことである。さらに、6月末には西成警察署長と市民生局長と地元の商店経営者と民生委員ら150名が出席する懇談会が開催され、この席上で市民生局長が「騒ぎをなくすには、労働者の精神面での指導が根本だと思うので、地元の人たちも協力してほしい」と要望している¹⁷。先の巻頭文で批判されているのは、この発言である。

以上のように、府・市・府警及び地元商店との連携による総合的対策が進められようとしていたことをふまえるならば、松原の提起や会活動の意味するところが明瞭になるであろう。それらは労働者を置き去りにしたまま釜ヶ崎対策が推進されることのないように働きかけるものであった。そして、政策担当者たちに会員の声を届けることによって、労働が参加する地域再生に道を開き、さらに「上からの指導」という姿勢を批判することで、政策担当者と労働者が対等なかたちで連携できるように要望するものであった。

(2)高揚する労働運動と学生運動に直面して

ところで、暴動が頻発する1960年代後半から70年代初めにかけての時期は、釜ヶ崎でも本格的な労働運動団体が組織され、その活動が労働者の権利獲得に関わる様々な成果を挙げる時期でもあった。例えば、1969年には全港湾建設支部西成分会が発足し、その運動を通じて「ソーメン代・モチ代」と呼ばれる夏冬の一時金支給や日雇雇用保険制度の適用などが実現していた。さらに、大学紛争などを経て釜ヶ崎にたどり着いた若い活動家を中心に「暴力手配師追放」を訴える闘争もはじめられるようになり、「暴力手配師追放釜ヶ崎共闘会議(通称「釜共」)」が1972年に発足している。

それでは、以上のようなかたちで労働運動が高揚している状況を松原はどう見ていたのか。まず注目すべきことは、先述したように、地域を再生するためには労働者と地元商店と行政との連携が必要であることを松原は提起していたが、その場合でも労働運動との連携には全くと言っていいほど言及していなかった点である。そのような姿勢の由来は、松原が書き残した詩や随想

から窺い知ることができる。当時佐世保事件や羽田事件でたたかった学生運動団体、即ち三派系全学連（以下全学連）について所見を述べた、「全学連と詩人」というタイトルの随想が会誌に掲載されているので、そちらを考察してみよう。

松原が全学連に関する随想を書く契機は、18歳になったばかりの大学生である甥が全学連に所属しており、羽田事件にも関与したことが発覚したため、甥に会って事情を聞き出そうとしたことにあった。甥は松原との対話を拒否したが、高校三年生の松原の息子との対話には応じ、夜を徹して語り明かしたという。この随想は、松原の息子が学校新聞に掲載するべく執筆した甥との対話記録を引用し、それに対する松原の批評が後半に続くという構成になっている。

さらに彼（松原の甥／能川）は続ける。

「資本家の独裁によって労働者は縛られていき、現在がその資本主義社会の絶頂、すなわち少数の資本家の独裁社会になっているのだ！だから僕らは、労働者の解放のために一致団結し、プロレタリア革命を起こすのだ。否そうしなければならないのだ」

「共産主義国家を建立するということかい」

「いや違うんだ、国家じゃないんだ！そういう社会を造るのだ！」

「それはあくまでもユートピアじゃないか！」

「何がユートピアだよ、それを達成するために僕らは、一致団結しないと駄目なのだ！現在の秩序を破壊し開拓していくのだ！それが人間の残された道なんだ。君らのようにデモに参加しないやつには解りっこないんだ。又話す権利がない！」

「だけど、その方法だけじゃなくて、他に方法があるんじゃないのか？」

「そのことについて僕は聞いてみたけれど、誰も答えられないじゃないか！僕らはこの資本主義国家をぶっ壊さなければ駄目なんだ、革命だよ！」

……（中略）……

対象的なこのふたりの学生の対話を読んで、私（松原／能川）は、山谷で機関誌「人間劇場」を発行している「一粒会」の人達と、釜ヶ崎で機関誌「裸」を発行している「裸の会」の人達との対比が、そっくりこのふたりの学生に当てはまるように思われて興味をそそののである。

「一粒会」は、ある一つの思想に徹して、自分達の主義を実践遂行しようとする人達のグループであり、「裸の会」の人達は、あくまでも文学を通じて、現代社会における人間性を追究しようとする人達の集団であるところに、このふたりの学生との間に対比的類似点を発見することができるのである¹⁸。

二人の対話とそれへの批評を通じて、あまりにも純粋かつ情熱的に闘争を活動目的とする、未熟な若者集団として全学連が描き出されている。そして、対話している二人の考え方の違いは、東京・山谷の解放と自立を訴える一粒会¹⁹と、文学を通じた人間性追求を目指す「裸の会」との違いでもあるとする。これらのことから窺えるように、松原にとって労働運動と学生運動は、「革命による労働者解放」という主義主張の実践を自己目的とする運動であった。そして、この随想の末尾は「三派系全学連の行動は決して肯定すべきものではないが、彼等学生がもつ純粋さと熱

情こそ、現代詩人がもたなければならない最も大切な要素ではなかろうか」という文言で締め括られるが、ここから窺えるように、学生たちの純粋さと情熱には共感を覚えても行動そのものは肯定しないというのが、全学連に対する松原の評価であった。

そして、高揚する釜ヶ崎の労働運動に対する「裸の会」の向き合い方は、以上のような松原の学生運動に対する評価のうち、純粋さと情熱に対する共感を取り除いた、否定的評価のみを色濃く反映させたものであった。例えば、会誌『裸』78号に掲載された、「裸の会同人」による巻頭文は、「暴力手配師追放」を掲げる東京・山谷の解放委員会に対して「その主義思想の拡張のために労働者を利用することだけは厳につつしんでいただきたい」と非難する²⁰。また99号の巻頭文では、実話として「この頃、釜ヶ崎に学生みたいな奴が仰山、ふえてガタガタしてるやろ、恐いかな学生は」という労働者の声を引用し、ピラの張出しと宣伝集会という方法で釜ヶ崎の解放が実現するとは誰も思わないし、労働者はむしろ素朴な恐怖心を抱いていると締め括る²¹。

以上のように、「革命による労働者解放」という主義主張の実現のみを目的とするものとみなし、時としてそれを畏怖する労働者の声まで引用することによって、運動が労働者から支持されていないことを強調するのが、「裸の会」の労働運動に対する姿勢であった。そのような姿勢で書かれた会誌の巻頭文は、運動に対する労働者の不信感を根付かせようとするプロパガンダの役割を果たすものであったと言えよう。その意味では、労働運動に対する「裸の会」の向き合い方は、「防犯コーナーだより」などの媒体を通じて「釜共」と労働者との分断を図る、後の西成警察署による労働運動取締方針²²の先駆けとなるものであった。

おわりに

「裸の会」は西成警察署の防犯相談コーナーの活動の中から生まれた。その意味では、警察による暴動再発予防策や労働運動取締策を補完するものとみなされるべきものかもしれない。しかし、主催者・松原忍の労働者との向き合い方を考察してみると、そこには警察による取締の補完では片づけられない側面があったことを、認めないわけにはいかない。

まず松原の労働者との向き合い方は、かつての自分の人生経験と重ね合わせながら労働者の生き様を観察し、そのうえで詩作という自己鍛錬を勧め、飲酒とギャンブルに依存する生活習慣の改善を働きかけるというものであった。そのことを確認したうえで、ここで新たにふれておきたいことがある。それは、会発足直後の随想の中で松原が「孤独の城砦に閉じこもる人達を一人でも多く、裸の会の仲間とし、これらの人達のうらぶれた心を温めてやらなければならないと私は考える。……（中略）……そのために努力することが、釜ヶ崎に生きる私の唯一の道であると思っている」²³と述べていることから窺えるように、詩作の勧めに応じる人びとの間に交流の場を作り、そこに自らも一人の人間として関わり続けることが、松原にとっての「釜ヶ崎に生きる」ことであった点である。そこにみられる労働者との向き合い方は、蔑視や同情とは異なる。お互いに孤独な人間として詩作を通じてふれあうことによって、心豊かに生きていこうと働きかける「共感」の姿勢がある。筆者が本稿のタイトルに「釜ヶ崎に生きた警察官」という表現を用いた理由はここにある。

確かに高揚する労働運動に対しては、「革命による労働者解放」を自己目的化するものとして退ける態度をとったが、府・市・府警の連絡協議会に対しては、労働者を置き去りにしたかたちで地域再生が進められないように働きかけたこと、そして、府・市・府警及び地元商店経営者と会員が一堂に会して討議する場を設定したことを見落とすわけにはいかない。決して恒常化したわけではないが、これらの試みは、高度経済成長期の段階で地域再生について協議する場が設けられたことを意味するであろう。「裸の会」の活動は、釜ヶ崎の地域再生の歴史を考えるうえで無視できない位置にあることは間違いない。

最後に、今後深めるべき重要論点を二つ挙げて、本稿を締め括ることにしたい。

一つは、「裸の会」は文芸サークルとしての守備範囲を越えた活動にも着手するようになることである。定期的に行なわれた文化祭や物故会員の合同慰霊祭、ソフトボール大会をはじめとするレクリエーション活動が、それに該当する。その意味で「裸の会」は、労働者を担い手とする住民自治を通じて地域再生を実現しようとしていたという評価も可能であろう。こうした活動がどのような人びとに支えられたのかに注意しながら、その歴史的役割について考察する必要がある。そしてもう一つは、労働者を中心とする住民たちの表現意欲を喚起したことである。

① 私の念願

夜中に目がさめると寝られない。明日の仕事が不安だからだ。我々日雇いは安定した職業でない。雨が二日も続けば苦しみ毎日分室の前で大勢の求職者を想像するとあぶれはしないかと不安におびえてくらしている。ここに貯蓄の必要性がある。貯蓄によってあぶれても生活の安定が保たれ、またそれによって希望を見出す事が出来ると確信する。「宵越の金は持たない。」これはアンコ同志の共通の気持である。然しそんな事を言っていては、病氣災難の時に忽ち困るだろう。それ位はよくわかっている。ドヤ暮らしの人間なら……

要するに時間で区分すると、五時～八時までの時間でよい。受け付ける夜銀行と、自主的に貯えてやろうと心構えだ。釜ヶ崎の生活は変るのではないかと、俺は意志が弱いから実現が不可能かも知れないが、質屋の引出しに利用したい。この二月に入質したまま背広が今だに出せない状態だ、これは私一人だけかも知れない。然し正直な所、金を持ち続けているから貯らないのだ。恥を忍んで実際の気持を書いて見た。あゝどこかで預ってくれないかなあ²⁴。

② 太陽に祈りつつ

神経痛がまた私を苦しめる

鈍痛にまじって針をさすような痛み

道は樹蔭すらない一本道なのに

太陽はまるで貧乏で持病持ちの私を試練するように容赦なく照りつける

いつものように両手を合わせてお天とう様をおがむ

神さませめて今日一日の生活費が儲かるまで

私に健康をお与え下さいませ

まだドヤ銭だけしか儲けておりません

米代もいります

お風呂銭もほしゅうございます
なにもかも高くなつてとてもじつとしては生きていけません
暑くても足が痛んでもそれに打ちかつ強い精神力を私にお授け下さい
三人の愛児の力強い成長が私の夢なのでございます²⁵

①は、会の発足から解散まで寄稿し続けた労働者が書いた随想で、②は、会発足直後から作品を寄稿し続けた、行商をしながら母子家庭を営む女性が出した詩である。いずれも、失業や病気のリスクに常に直面する日常生活の中で実感する不安と苦悩、そして、松原の働きかけに素直に従うかたちではあるが、それを強い精神力で乗りこえたいという切実な願望を表現している。「裸の会」の活動は、ごく限られた動きとはいえ、労働者を中心とする住民の表現意欲を喚起していたのである。そうして生まれた作品は、「裸の会」解散後に釜ヶ崎で結成された文芸サークルにあらためて注目されることもあった。例えば、労働運動の経験者が編集委員会に加わったかたちで発足した『労務者渡世』には、「裸の会」会長としての松原を紹介する小文が掲載され、そこには「発表される作品のなかに労働者の血がかよっているものを多く見出せるのは事実だった」と記されている²⁶。「裸の会」の活動が、以後の文化活動に与えた影響も重要論点となろう。

以上のような、今回ふれることのできなかつた重要論点も深めたうえで、あらためて「裸の会」の活動の歴史的位をを考えたい。それが次の検討課題である。

註

1 釜ヶ崎の戦後史を概観するにあたっては、以下の文献を参照した。本間啓一郎「釜ヶ崎小史試論」（釜ヶ崎資料センター編『釜ヶ崎 歴史と現在』（三一書房、1993年））、原口剛「釜ヶ崎という地名」（原口ほか編『釜ヶ崎のスヌメ』（洛北出版、2011年））。

2 「裸の会」発足の経緯や活動を概観するにあたっては、以下の雑誌・新聞記事を参照した。松原忍「「裸」創刊一周年を迎えて」（『裸』13号、1963年3月、1～3頁）、「仲間 裸の会—文芸に生きがい“あいらん”の生活を書け—」（『朝日新聞（大阪市内版）』1970年9月21日）。

3 前掲『釜ヶ崎 歴史と現在』、前掲『釜ヶ崎のスヌメ』。

4 松原忍「「裸」創刊十年目を迎えて」（『裸』109号、1971年3月、1頁）。

5 松原忍『釜ヶ崎羅漢』（関西図書出版、1986年）の「あとがき」より。松原の履歴に関する記述の中で「」を用いて引用した箇所は、全てこの「あとがき」からの引用である。

6 前掲「「裸」創刊一周年を迎えて」。特に断らない限り、本章における「裸の会」結成の経緯に関する記述はこの記事を参照している。

7 工業用アルコールをラムネで薄めた密造酒のこと。

8 『裸』創刊号、1962年3月、11～12頁、作者名は「淀広」。前掲『釜ヶ崎羅漢』12～13頁に所収。

9 松原忍「はじめに—「裸の会」会員の皆さんへ—」（『裸』3号、1962年5月、2～3頁）。

10 『裸』53号、1996年7月、20頁。前掲『釜ヶ崎羅漢』50～51頁に所収。

11 松原忍「「裸の会」の使命について」（『裸』5号、1962年7月、2～3頁）。

12 例えば『裸』4号（1962年6月）の38～39頁には、「明るいニュース」と題して、数名の会員が禁酒・

節酒に成功したことを報じ、「お互いに節酒していこうではありませんか。とくに身を亡ぼすバクダン焼酎は絶対飲まないことにしようではありませんか」と呼びかける記事が掲載されている。会発足直後の会誌には、このような呼びかけを記した記事が随所で見られる。このことからして、禁酒・節酒や貯金などの生活習慣改善を会員に勧めることが、会活動の当面の目標とされていたことは間違いないと考える。

13 本章で頻発する暴動と高揚する労働運動を概観するに際しては、以下の文献を参照した。丹羽弘一「釜ヶ崎―暴動の景観―」（前掲『釜ヶ崎 歴史と現在』）、平井正治『無縁声声』（藤原書店、1997年）、原口剛「騒乱のまち、釜ヶ崎」（前掲『釜ヶ崎のススメ』）。

14 「はじめに」で述べたように、同会の編集部は松原と若干名の労働者有志で構成されている。文責が「裸の会同人」とされている場合は、編集部構成員の誰かが匿名で書いたことが推察される。したがって、文責が「裸の会同人」である場合、必ずしも松原が書いたと断定できないのであるが、会活動の中に占める松原の存在の大きさからして、松原の考え方と異なるものが巻頭文に書かれることはあり得ないと考える。

15 『裸』54号、1966年8月、1頁。

16 参加した会員の人数は6月15日が35名、7月15日が45名。司会は編集部の労働者が努め、松原は議事内容を会誌に掲載するための記録係を担当している。なお、この懇談会の議事録は『裸』の53・54号に掲載されている。

17 「明るい“釜ヶ崎”へ 地元と初懇談」（『朝日新聞（大阪市内版）』1966年6月30日）。

18 『裸』73号、1968年3月、1～3頁。

19 一粒会は、当時東京・山谷で活動していた梶大介が、スラムで生きる人びとの解放を実現するために組織した運動団体。1967年以降になると中国の文化大革命の影響を強く受けるようになり、その会誌『人間劇場』には、山谷の解放と自立を実現するためには、文革にならった闘争が必要であるという論陣を張っていた。

20 裸の会同人「山谷騒動に思う」（『裸』78号、1968年8月、1頁）。

21 裸の会同人「学生と労務者」（『裸』99号、1970年5月、1頁）。

22 前掲平井正治『無縁声声』157～159頁を参照。

23 松原忍「釜ヶ崎に生きる」（『裸』2号、1962年4月、5頁）。

24 『裸』5号、1962年7月、13～14頁。

25 『裸』31号、1964年9月、2～3頁。

26 『労務者渡世』6号、1975年5月、22頁。

〈付記〉本稿はJSPS 科研費 25370766（基盤研究 C／代表者：能川泰治）の助成を受けている。

また、詩の解釈については上田假奈代氏より貴重な助言を賜った。末尾ながら記して感謝申し上げます。